

はっけん

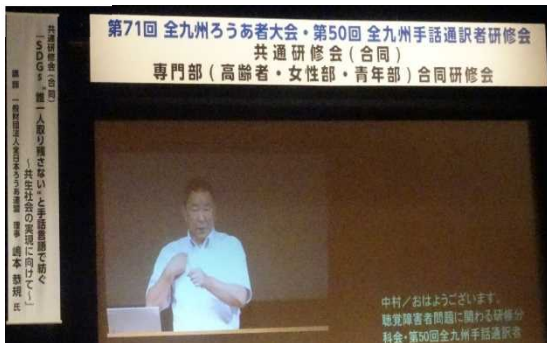
2023年11月号

九州手話サークル連絡協議会
URL:<http://www.kyusyuren.org>

日毎に秋も深まり紅葉の美しい季節となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

今回の「はっけん」は、今年9月16日（土）～17日（日）に宮崎市で開催されました第71回全九州ろうあ者大会&第50回全九州手話通訳者研修会の参加者レポートを各県から多数いただきましたので、紹介いたします。

🌰 全九州ろうあ者大会 感想文(共通研修) 🌰



戦後復興期の苦しい中でも組織を設立しようと思いをもち、全国各地からろう者が集ったときから、2030年までに達成することを目標としたSDGs(未来のこと)まで幅広いお話を聞くことができました。

インターネットもSNSもないのに全国各地に情報が行き渡ったということ、交通インフラも整っていないためにどれほどの時間がかかるだろうかと

思ってこの足を踏みたくくなるような時代に、聞こえない人たちは組織の必要性を確信していたのだらうと感じます。一方で、若い人たちが苦しんでいた時代の全青研、女性運動が活発であった頃に婦人部が文部省や厚生省と交渉を始めたというのは、聞こえないことによる不利益は格段に大きいけれど、時代に合った運動は聞こえる人の理解と共感を得やすく、実現への早道なのかもしれないとも感じました。

そうはいつでも、生きるか死ぬかほどの大きな問題はほとんどなく、より良く生きるための権利を求める時代。今活動をしている私たちが手話言語法や手話言語条例制定を実現するためには、どのように社会に呼びかけるのが効果的か。それがSDGsにそった課題の整理や提言の方法なのではないでしょうか。

いったんの期限まであと7年。私のすべきことは、聞こえない人のことだけではなく、この地球に起きていることも周囲に理解してもらおうことだとすると、なんだか活動の壮大さに圧倒されます。ロナの感染状況が各県ごとに違っていた為、活動の内容は様々ですが、状況に応じた活動内容の報告を頂いています。



(福岡県 赤嶺 寛徳)

🌰 第50回 全九州手話通訳者研修会共通研修（合同）に参加して 🌰

テーマ 『SDGs “誰一人取り残さない” と手話言語で紡ぐ
～共生社会の実現に向けて～』

日時 : 2023年9月16日(土) 10:00~12:00

会場 : 宮崎市民プラザ ・ オルブライトホール



基調報告では、九州聴覚障害者団体連合会・吉野幸代福祉労働部長が、全国の優生保護法裁判で強制不妊手術をめぐる損害賠償を求めている裁判への支援の必要性について訴えておられました。

旧優生保護法(1948年~1996年)下で強制的な不妊手術が約1万6,500件実施されていました。1948年(昭和23年)から1996年(平成8年)まで存在した事は大いに疑問を感じ、障がい者と言うだけで、人並みに子どもを持ってない社会がつい最近まであったと言うことは、日本の恥ずべき歴史だと痛感致しました。



参考) 強制不妊手術の実施は1949年から急増し、1950年代半ばをピークに減少に転じたものの、1960年代になっても積極的に実施されており、公的記録によれば1992年の1件が最後のようなのです。

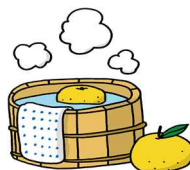
その後、全日本ろうあ連盟理事の嶋本恭規氏より、第1回ろうあ婦人集会in京都が1971年に開かれた。差別や偏見により手術で子供を産む事が出来なかった大勢の人が集まり、“涙の集会”と言われた。

平塚らいてう、市川房枝、緒方貞子各氏の尽力もあり、かなり女性の地位は向上したが、まだまだ世界の中では下位に甘んじている。

持続可能な開発目標(SDGs)は「誰一人取り残さない」という理念を掲げている。

共生社会実現のため更なる取り組みが私たちに求められていると思うとのお話がありました。

私達も共生社会の実現に向けて、どのような取り組みを進めていけば良いのか、一緒に考えてみましょう。



(大分県理事 管原 久徳)



🌰 第1分科会「手話言語」🌰



去る9月16日、17日に開催された九州大会 in 宮崎に参加してきました。私は第1分科会「手話言語」に参加。

講師は全国手話研修センター 手話言語研究所 標準手話研究部 九州班 班長の山本秀樹さん。テーマは「SDGsと手話言語」。

手話言語研究所の紹介や「わたしたちの手話」「手話辞典」の話、そして「新しい手話」への経緯

- 手話の全国的な共通性の増進
- 日本語との互換性

の2点を目的に「標準手話」としてスタートした事

研究活動として「新しい手話」がどうやって作られていくのか、その手話言語とSDGsとの関連などのお話がありました。

「へえ～そうだったのか！」と知る事がたくさんであったという間に時間が過ぎていきました。

その中で1番楽しかったのが県別のワークショップ。

このために席も事前に決められており佐賀県は特等席？読み取り通訳さんのすぐ後ろの席でした。

新しい手話も大切。ですがその地域に残る手話も大事にとの事で「保存手話」にもちからを入れているようで「創作手話」と題された20単語が書かれた紙に沿って地元ではどう表すかを話し合い発表。

同じ手話もあれば初めて見る手話もあったりでたくさんの歓声があがりとても盛り上がりました。そしてこの様子はちゃんとビデオに収められていました。参加者の皆さんの表情も良くてまた手話の魅力に触れたなと感じる時間でした。

1番面白かったのは熊本だったか？鹿児島だったか？忘れましたが「失敗」の手話が投げキスで衝撃!!! 分科会の帰りにみんな「お疲れ様。また明日ね」の代わりに「失敗」の手話で挨拶。笑顔あふれる分科会となりました。

(佐賀県 唐津手話の会 井上恵美子)

🌰 第3分科会「労働」🌰

九聴連の福祉労働部長 吉野幸代氏からの報告冒頭に「労働は、九州は久しぶり。全国では毎年労働分科会はあるが、九州からの参加者が少ない。手話協力員の参加も少ない」から始まった。もったいないなと思った。

講義に入り講師の岩山誠氏は、

①聴覚障害者就労の現状をデータで定量的に説明。職場で困ったこと←コミュニケーション、職場における配慮の提供←通訳者による配慮提供の遅れ、聴者とのコミュニケーション認識の差異←理解度の感じ方の差がある。



課題は聴者の認識を高め、必要な配慮がもらえるようにすること。

②働きやすい職場づくり。

職場側はどう配慮すれば良いか？配慮は必要？不要？企業秘密は洩れないか？コストは？など聴障側からの働きかけで配慮実施につなげる。説明技術の向上によるセルフアドボカシー「私のトリセツ」などのツールも紹介。自力では説明が難しい場合は、支援機関も活用する。

コロナ渦で働き方も一変したがおかげで広がった合理的配慮もある。

③支援制度の整備拡充の重要性については手話通訳や要約筆記の委託助成金や設置・委嘱の助成金の説明。

知らなかったろう者も多く居たようだった。

講義の後、「②働きやすい職場づくり」についてグループワーク。長崎と佐賀グループはろう者1名聴者5名。唯一のろう者に話を聞く、2回の転職理由は筆談もなくろう者も一人で寂しかった。今の会社は手話通訳はないものの筆談や身振りでコミュニケーションできる。他にもろう者も居るので手話での会話ができるから続けられる。



また、ろう者と同じ職場で働く通訳者の話を纏めた内容が、手話通訳があれば情報がリアルタイムで伝わる。情報量がキャリアアップにも繋がる。

色々苦勞しながらも何とかコミュニケーション取する方法を見つけ仕事してるという意見が多かったが手話でのコミュニケーションがあればもっと働きやすい。

(佐賀県：松本美樹)



第1講座（全通研九州ブロック）



「全九州手話通訳者研修会 50年目に思うこと」



講師：（一財）全日本ろうあ連盟 前理事長 安藤 豊喜氏
九州聴覚障害者団体連合会 前理事長 松永 朗 氏
全通研九州ブロック 相談役 若杉 義光氏
全通研九州ブロック 相談役 西川 研 氏

講師4名は正に全国・九州の顔とも言える方々が揃い、申し込みの時点で特に安藤氏のお顔を見られるだけでも楽しみと、そんな思いで参加された方が多かったと聞きました。

説得力のある話し方は健在で、頷きながら見入りました。

安藤氏からは、第 1 回全九州手話通訳者研修会開催時期とその背景から、現在に至るろうあ運動や手話関係事業の開始による国民意識の変化についての話がありました。

一番強調されたのが、1981 年開始の『国際障害者年』とその後の十年。この実施により、障害者の「完全参加と平等」は国民の意識を、差別や蔑視から理解や認識に変えたという意味で画期的な時代であってと話されました。

私事ですが、1979 年民法 11 条の改正「準禁治産者」の時は手話に出会う前の学生でした。

講義の中で学んだ民法 11 条の改正については、表面しか捉えておらずその後ろろあ者とかかわる中で「準禁治産者」と繋がり、少しですが分かるようになってきました。これがろうあ運動なのかと感じたあの頃を、思い出させてくれる今回のお話でした。

若杉氏からは、全通研支部誕生から九州全支部設立までに 12 年を要したことや、「全九州手話通訳者研修会」の変遷のお話でした。研究討議や分科会のテーマが、当初は毎年同じだったものが、段々とその頃に問題となっていることがテーマに取り上げられています。50 年が経った今、若い通訳者が少ない、ろうあ運動の歴史をあまり知らない（ろう者が語っていない）などの提言がありました。最後は活動を共にする仲間たちに向けて「九州は ひとつ！」の合言葉でしめられ気持ちが高まりました。

(長崎県 大村手話サークル Y.K)

🌰 全九州ろうあ者大会・全九州手話通訳者研修会に参加して 🌰

共通研修会、研修分科会は、”SDGs 誰一人取り残さない“をテーマとして行われました。私は自分が会社員であることや、ろう者が会社でどのように働いているのか、どういった課題があるのかを知りたかったので「労働」分科会を選択しました。



分科会では、耳が聞こえない人が職を求める際や、仕事に就いてからの課題などを、講師の経験談や、参加者とのグループディスカッションで共有することができ



ました。全てのハローワークに手話協力員が設置されていない、職場でうまく情報のやり取りがいかない、情報が遅れて入ってくるなどコミュニケーションはやはり大きな課題になっていました。誰一人取り残してはいけないのに、取り残されているのではないかと。SDGs のことをみんなが理解することが、働きやすい環境づくりへと繋がるということを改めて感じました。

研修会の前後では、長崎組と雑談したり焼酎を飲んだり。今回私はバイクで来ましたので、朝から日南フェニックスロードを走ってモアイ像を見たり、それなりに宮崎を堪能してまいりました。もちろんチキン南蛮も食べました。甘酢の海にたっぷり浸かったチキンに、これでもかとかけられたタルタルソース。この最高の組み合わせを生み出してくれた宮崎市民に感謝。焼酎の炭酸割りも新しい発見でした。



(長崎県 長崎手話サークル 佐野慎一郎)

第2講座（九手連担当講座） 「手話サークルの誕生から現在・未来」



九手連担当の第2講師の講師は、九手連顧問であり、熊本県わかぎ顧問の村本宗和氏でした。「手話サークルの誕生から現在・未来へ」と題し、50年以上前の手話サークル黎明期の活動の様子について、九聴連の前理事長であり、熊本県ろう協の現理事長の松永氏との出会いや、手話通訳の必要性について、行政や時には司法にまで物申してきた経験談を基に講演いただきました。



昭和45年に手話奉仕員養成事業がスタート。前後する形で、九州各地で手話サークルが結成されていきます。しだいに手話通訳者の質が求められ、また横の繋がり的重要性もあり、熊本には「県わかぎ」を、そして九州では「九手連」という組織も立ち上げられます。“九州は一つ”をモットーに進められましたが、結果的に沖縄に県サ連を立ち上げることができなかったことが残念だったとも話されました。現在、手話サークルには様々な課題がありますが、「手話活動は人のためではなく、自分のためでもある！手話サークルは心を耕す場であり、たくさんの宝を創ってほしい！」との言葉が印象的でした。

後半は、4グループに分かれてのグループ討議を行いました。「手話サークルが輝き続けるためには」をテーマに、各サークルの現状と課題を話し合いました。私が参加したグループでは、新しい会員さんへのフォローや、役員等の後継者不足、学習方法の工夫等について話し合いました。



参加者35名ではありましたが、「貴重な体験が出来、サークル活動のヒントが見えました。」又、村本さんの講演では、「サークルに対する熱意を感じ、組織の大事さを改めて感じました。」との声も聞かれました。

(熊本県 鹿本わかぎ Y.M)

🌰九州ろうあ者大会 in 宮崎に参加して 🌰

9月17日(日)10時~15時 全九州ろうあ者大会式典とアトラクション、大会引き継ぎ式に参加しました。



開会式の来賓祝辞で河野宮崎県知事が手話で自己紹介され、また役員との定期会合でも会議の終盤で手話の学習をされている事も紹介され、手話の普及を出来るところから実行されているのだな、と感じました。

大会式典スローガンは6項目あり、手話言語法に関連した内容や、2025年デフリンピック成功に向けた取り組み推進などが掲げられていました。

県わかぎ研修会でも問題提起されていた、会員減少や通訳者の後継者不足も、九州全体としても同様な傾向である事が分かりました。

誰も取り残さず、共に幸せに生きて行ける社会へ向かう事は、簡単ではないけれど、しっかり学んで、考えて、地道に少しでも前進していく事が必要だなと感じました。

お昼ご飯は地元の手作り弁当。おかずが多彩で美味しかったです。ホール会場内で食べたのですが、その間ステージでは午後出演の「男組」の皆さんとスタッフの方々が、忙しく動き、打ち合わせや位置の確認をしておられました。あちこちで手話が飛び交い、賑やかな光景でした。

私は舞台裏や制作秘話などを見るのが好きなので、この昼休みの時間も興味深く楽しむことができました。

13:00~15:00は楽しみにしていた「男組」の皆さんのパフォーマンス。会場の皆さんを巻き込んでの楽しい笑いの時間でした。ドラマ「サイレント」に出演されていた江副さんも男組メンバーですから、生の江副さんを拝見出来て嬉しかったです。

最後の大会引き継ぎ式では緊張の面持ちで熊本の皆さんが舞台に立たれ、いよいよ熊本での大会開催を実感しました。大会終了時は雨でしたが、会場を出る頃は雨上がりの空に大きな二重の虹が出ていました。居合わせた方々が空を指さしながら笑顔を見せ、これもまた印象的な宮崎大会でした。



(熊本県 水俣わかぎ 徳永博子)



第1講座『全九州手話通訳者研修会 50回目に思うこと』に参加して

Kagoshima



◆講師：九州聴覚障害者団体連合会 名誉理事長 安藤豊喜氏
「全九州手話通訳者研修会の道程」と題して。

1947年、日本国憲法には国民の基本的な人権の保障がうたわれている。
それを拠り所として1947年、全日本ろうあ連盟が創立された。

1970年、手話奉仕員養成事業が開始されたが、テキストやカリキュラムはなく、ろうあ協会に丸投げだったので、大変だった。

1981年の国際障害者年と、その後の十年は、理解や認識を変えた時代であったが、聴覚障害者はコミュニケーションが取れないので、人間性の差別をされた。

◆講師：九州聴覚障害者団体連合会 参与 松永朗氏

1953年、手話講習会受講3回目の若い女性から「自殺をしようと思っていたが、手話講習会の案内を見て受講した。自殺は止めて、人生をやり直すため東京に行く」と手紙をもらった。どうしてそのような心境になったのか今でも私にはわかりません。わかる人がいたら教えてくださいと言いたい。

◆講師：全国手話通訳問題研究会九州ブロック相談役 若杉義光氏

九州全支部設立までに12年を要した。1988年長崎集会から、「九州はひとつ！」を合言葉に活動をしている。

◆講師：全国手話通訳問題研究会九州ブロック相談役 西川研氏

活動費不足に苦労した。今後の課題の一つに通訳者の高齢化と減少がある。



★後半

次世代活動委員2名から講師4名への質問タイム

- ・ろう者は、聴者と協力して変わったが、聴者はどう変わったのか？
- ・ろうあ運動をきちんと伝えていない。
- ・ろうあ運動に関わるろう者の姿勢に魅かれた。
- ・「ろう者がいる 手話がある」は特別なことではなく当たり前

の前のことであることを広めていきたい。

- ・運転免許を取得できたことは、大きな喜びと誇りを持てた。これで聴者並みになった。

★感想

私は、今回初めての参加だった。これまでの活動の様子や思いを4名の講師から直接学べたことは大きな力となり、足を運ぶことは大切であると実感した。

(鹿児島県 手話サークル太陽 仮屋恵子)

編集後記

冬将軍はもうそこまでやって来ています。

皆様のレポートを拝見しながら、私個人として思を巡らしています。人間関係の難しさは障がいのある方ない方に関わらず起こり得る問題かもしれません。お互いが歩み寄る為には、双方の理解が必要だと痛感致しました。

小さな一歩をたくさん集めて、大きな一歩へ繋げて行きたいです。

九州手話サークル連絡協議会ホームページ URL:<http://www.kyusyuren.org/>
の機関紙「はっけん」をご覧ください。
「掲示板」への皆様のご意見・ご感想をお寄せ下さい。



九州手話サークル連絡協議会 発行責任者 池尻和吉
事務局長 小濱規男
広報担当 羽田野一美（大分県）